

## 序

物分りのいい人と、わるい人がいる。いい人はくどくど説明されなくても話の内容が理解でき、わるい人は同じ内容の理解に手間がかかる。物分りのいい人は理解力に優れ、頭がいいと言うことになる。一方、話す方も要領よく整然と秩序だてて説明できる人は頭がいいと言われる。頭はいい方に越したことはないと思えるが頭がいいとかわるいとか言うのは、一体どのようなことを言うのだろうか。

「一を聞いて十を知る」とか、早く正確に計算ができるとか、いわゆる頭の回転が早くて推理力に長けている人は、まず頭がよいと言われる。あるいは他人の思いつかないようなアイデアとか企てを出せる企画力とか独創力のある人、また何を聞いてもよく知っている博識の人、物覚えの人並み優れている人など記憶力のよい人も頭がよいと言われる。さらに問題の所在がすぐ分りの確な判断によって、てきばき処理してしまうとか、物事の本質が早く見え、場の状況をいち早く認知してしまったり、他人より先が読めたりするような勘のいい直感力のすぐれた人も頭がよいと言われることがある。

もっとも勘のよさと頭のよさとは異なるという説もあるが、共通するイメージは反応の素早さということであろう。これは反射神経がすぐれていることを意味する。例えばいかに難しい問題であっても長時間かけて粘り強く取り組みやっとな解決したところで余り頭がいいとは言われない。この場合、それこそ頭が痛くなるような面倒で複雑な問題に、倦むことなくめげずに取り組んだ強靱な神経の持ち主ということで評価され、どちらかと言えば頭が強いということであろう。

よく研究には頭が要るといわれるが、研究者にとって大切なことは、先ずどのような事象にも何らかの問題の所在を感じるだけの直感力あるいは勘のよさであろう。そして一度、疑問を感じたらその事象をいかに説明できるか、その解明に納得のゆくまで追求し続ける執着力のあることであろう。実はこうした諦めず、弛むことのない努力が求められるのは研究に限ったことではない。このように考えると研究者に必要な資質とは、格別な頭のよしあしと言うよりも、むしろ鋭敏かつ強靱な神経といった方が適切なのかも知れない。

1993年4月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士 太田利彦